

冬の動物の足跡を探す 野外保育 森の子（長野県安曇野市）

冬の動物の足跡を探す

雪が積もると動物たちの足跡を見つけることができる。時々保育の補助をお願いしているKさんは本業が動物の調査。そこでKさんが保育補助に入った時に動物の足跡探しに出かけた。特に雪が降った直後は絶好のチャンスで、体の軽いリスの足跡も指先まで見ることができる。冬はきっちりと身支度をして出かける。きっちりと身支度することで寒さの厳しい冬でも散歩することができ、楽しめる。それでも年少児は寒さに涙することもある。



子どもたちはKさんの後をついていき、Kさんが「リスの巣がある」と立ち止まり赤松のずうっと上の方を見上げると子どもたちも一緒に見上げ、リスの巣を探す。足下にはいくつかの足跡があり、専門家のKさんが見て「ここで木から降りてこっちまで走ってここからまた木に登ったようだね。」と教えてくれる。子どもたちはその足跡を覗き込み、また別の足跡を見つけて「これは誰の足跡？」と聞く。狐だったり狸だったり犬だったりするようだ。

あまりたくさん足の跡探しをすると子どもたちは、今度は自分で手を使って足跡を作って「これ誰の足跡だか分かる？」とその自分で作った足跡をさして聞いたりする。わざと動物たちの足跡を踏んで消したりする姿も見られた。



<考察>

足跡を見て何の動物であるのかを判断するには足跡の形、足跡の並び方をじっくり観察しなければならない。大人でさえなかなか難しいことだ。だから子どもたちが途中で足跡探しには飽きてしまったのも仕方ないことかもしれない。また狐や狸は夜行性なので、なかなか姿を見ることができない。だから足跡から動物の姿をイメージしにくかったのだと思われる。事前にイメージしやすいような絵本や写真などを使った準備が必要だったと思う。また狸の歩き方、狐の歩き方、リスの歩き方もKさんが説明してくれたので、それを子どもたちとからだを使ってまねしてみたい。



糞さがし

足跡と一緒に動物の糞もKさんが一緒に見つけた。糞の形、中身によって何の動物の糞かを判断する。糞の中を棒でつついて調べるというやり方を子どもたちはじっと見ていた。このときはKさんがやるのを見ていただけだったが、次年度の5月頃に初めて行った散歩コースで「動物の糞があったよ！」ととても興奮した様子で知らせてきた。初めて行ったコースで自分たちで見つけたということにとっても喜んでいる様子だった。そして「誰の糞かなあ？」と言ってしげしげと観察していた。この日はKさんがいなかったので断定はできなかったが年長児が「この前Kさんがこんな形の糞は猿だって言っていたよ」と言っていた。

<考察>

子どもたちは大人のすることを実によく見ている。そして興味のあることは大人がびっくりするような記憶力で覚えている。あるときにその記憶を引っ張りだしてきて実践してみせる。このときの糞探しもそのような子どもたちの力を感じた一場面だった。

Kさんという動物調査の専門家が子どもたちと歩くということによって、子どもたちにいつもとは違う視点で森の中をのぞいてみるというきっかけ作りが出来たと思われる。それまでも、おそらくそこに糞はあったはずだが、それを見つけるという視点がなかったのでまったく気付かずに通り過ぎていたのではないかと。きっかけをもらったことで子どもたちの森を見る目がまた広がったことを感じた。

Kさんと散歩に行くことで保育者にとっても非常に良い勉強になった。保育者だけでなく保護者も一緒に散歩をする機会を作っていきたい。子どもにとって最も身近な大人である保護者が自然を見る目を養うことは大切なことであると考えます。

みどころ

今、四季を感じることができる環境を確保することが難しくなっているかもしれません。「この園」「この地域」だから実感し、その魅力を探求できるような場や機会を逃さず、子どもと一緒に体験したり様々な情動や学びを共有したりする大人の存在は、大変重要です。この事例のような身近な専門家のかかわりは、その後も貴重な体験に結びつきます。